

英米文化の背景

英米人の迷信・俗信考 (18) IV 年中行事

—その7 クリスマス (キリスト降誕祭) (1)—

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2009年10月1日 受理)

はじめに

クリスマス(キリスト降誕祭)は、キリスト教徒にとってこの上なく意味深い大切な祝祭である。人々は家族で、また地域の人々の間で、キリストの生誕を祝う。ただ、クリスマスには一つの特徴があり、信仰を異にする人々、つまりキリスト教徒以外の人々によっても広く祝われるという一面をもっている。今号では、クリスマスの変遷の概要史、またクリスマスを迎える諸準備に関する習慣と、それにまつわる迷信・俗信の考察を試みたい。(なお、クリスマスイヴとクリスマス、またそれに続くこの祝祭期の日々の諸習慣と、それらにまつわる迷信・俗信に関する考察は次号に記載する。)

1 クリスマスの概要史

1) クリスマスが12月25日に定められた経緯、異教の祝祭とキリスト教祝祭の習合

キリスト降誕祭は、12月24日のクリスマスイヴに始まり、そして25日の祭日、さらに続いて普通1月6日までがその祭儀期間とされる。

本来キリストの生誕が12月25日であったかどうかは全く不明であり、それがちょうど冬至の頃であったかどうかについても、その根拠は何もないとされる。実際、それは4世紀前までは別の時期に祝われていたとされる。これが冬至の頃に行われるようになったのは、キリスト教がローマ帝国において公認された後、4世紀になってからであった。¹⁾

キリスト教会では、よく用いてきた布教策として、もともと異教徒の間に広く行われていた諸祭儀に、キリスト教の意味づけを与えて教会の祭りとする方法をとった。これは彼らの意図する祭儀が、キリスト教徒以外の人々にも広く受け入れられるようにするための賢明な策であったと思われる。

古代ローマでは12月25日には「勝利の太陽神の誕生日」「Birthday of the Unconquered Sun」が祝われていた。これは古代ローマの冬至の祝いであった。これを日を変えずに、「正義の太陽」「Sun of Righteousness」であるキリストの降誕祭に相応しい日と定めた。さらにもう一つ、古代ローマでその直前の一週間に祝われていた「農神祭」「Saturnalia」の期間をも、キリスト降誕を祝うものとして取り込んでいる。その後もさらに、英国をも

含めた北欧諸国におけるゲルマン系の人々の冬至の祝祭である「ユール」「Yule」からもその習慣を取り入れたとされる。²⁾

こうして時の経過の中で、11世紀半ばにキリスト降誕祭は、古代ローマ人の諸祭とゲルマン人のユール等の複合要素が一つに習合されて「クリスマス」「Christmas」（この語は「キリストのミサ」「Christ's Mass」からのもの）となったと考えられている。

このような経緯をもつクリスマスには、特に中世の時代には、当然ながら異教の祝祭の雰囲気をもつ行事が含まれており、現在においてもその名残が見られる。例えば、前述の「ユール」に関係する「クリスマス前夜の大薪焚き」「Yule Logs」などもその一つである。これはクリスマスの前日、暖炉で燃やす大きな薪を家に運び込む習慣である。また、サマセットシアの農家で、最も大きいりんごの木にりんご酒を振り掛け、りんごの豊作を願う「りんごの木への祝杯」「Wassailing the Apple Trees」（当拙論、倉敷芸術科学大学紀要第9号 p.234 に記載あり）等もその類である。

2) 宗教改革の影響を受けて

この異教的内容をもつクリスマスの祭儀慣習は、宗教改革の時代に大きな様変わりを見せることになる。宗教改革を唱える人々は合理的な考え方を主張し、その結果クリスマスは「迷信的な祭儀慣習」とされ、果てはこの祭儀を行うことそのものが禁じられた。それによってクリスマスにおける多くの民間行事が止められることになった。例えばスコットランド低地地方などでは、改革教会の力が強く、民間行事が長期間徹底的に禁止されたため、この地方ではクリスマスを祝う代わりに新年を祝う民俗的行事が盛んになり、それが現在にも及んでいる。

同様のことが他の地域にも起きている。例えばイングランド地方では、ピューリタン（清教主義者）たちが極めて厳格な考え方で短期間の禁止措置をとっており、スコットランドにおけるほどではなかったにせよ、やはり民間行事に相当な抑圧の影響があったとされる。

その後のジョージ王朝の時代には、世の中全体における経済状態の悪化等により、クリスマスにおける民間祭事はいっそう衰退の方向に向かった。³⁾

3) ヴィクトリア朝に今日の姿のクリスマスに

クリスマスの祭事に関して、大きな様変わりの時期が到来する。それはヴィクトリア朝期であった。19世紀半ばの頃、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公 Prince Albert が異風を吹き込んだ。その一つとして、クリスマスツリー（後述、当拙稿 2-4)) を挙げることができるであろう。これが、いわゆる「ヴィクトリア朝風のクリスマス」の象徴となったのである。

一方、当時の文壇において名をなしていたチャールズ・ディケンズ Charles Dickens が *Christmas Carol* 『クリスマス・キャロル』等の作品を著し、一般の人々にヴィクトリ

ア朝風のクリスマスのムードを広めることにもなったようである。

このヴィクトリア朝風のクリスマスが、今日のクリスマスの祭事の祖型になったとされている。

2 クリスマスを迎える諸準備

1) クリスマスカード

クリスマスの準備については、たいていは当日の12月25日の相当前から始められる場合が多く、その前触れを務めるのがクリスマスカードである。古くから親しい者同士の間で、クリスマスカードが交換されていたとも言われるが、一般に広まるのは、商品としてのクリスマスカードが出されてからのようである。最初の印刷された絵入りの商品としてのクリスマスカードは、1843年にロンドンのサウスケンジントン博物館のヘンリー・コウル Henry Cole 卿の発案と企画で、イギリス人画家ジョン・カルコット・ホースレー John Calcott Horsley が考案し、1,000枚発行されたとされる。それは、当時の一般の人々が買い求めるにはやや高価だったようである。ホースレーのカードには、クリスマスにおける中流家庭のワインの食卓の楽しい団居(まどい)の絵と、唐草模様で仕切りをつけた貧困者の絵が併せて描かれ、またそこには今日も使われる“A MERRY CHRISTMASS AND A HAPPY NEW YEAR TO YOU.”の文言が印刷されていた。⁴⁾

1870年代になると、廉価でしかもカラーの石版刷りのカードが特別郵便料金で売り出され、人々の間で大いにもはやされた。このころにはアメリカでも、クリスマスカードを贈る習慣が広まったとされる。なお、1850年代以降には、カードの発売による収入を貧民救済等の慈善事業に供する風潮も高まっていったとされる。

今日では、クリスマスカードの交換は、キリスト教文化圏の人々の間でのみならず、一部、キリスト教徒以外の人々の間でも、特に若い人々の間で、大いに楽しまれている。

2) 贈り物

クリスマスに贈り物を交換する習慣のものは、イエス誕生の時に東方の賢者三博士がイエスの誕生を祝い、黄金、乳香、没薬の贈り物を持ってきたとの伝承に関わりがあるとされる。

紀元前のローマ人の間でも、冬至には贈り物を交換する習慣があったとされる。クリスマスの贈り物としては、時としては金貨もあったが、たいていは蜂蜜、果物、ランプなどに人気があった。またローマのサトゥルヌスの祭りの伝統から、富める者が貧しい人々に施しをする習慣があり、その名残りでクリスマスにはかなり古くから、裕福な者が召使い等の使用人に、また地主ならばその小作人等に、また親は子供に、贈り物をする習慣があったようである。(なお、同じ社会的身分の個人同士が贈り物を交換する習慣は、むしろ新年 New Year や十二夜 Twelfth Night 等のほうにあったとされる。)

この個人同士のプレゼント交換の習慣は、比較的新しいものと考えられ、19世紀のヴィクトリア朝時代中期に、クリスマス祝祭の商業化の波の中で始まったとされる。⁵⁾

3) 飾り付け、、、ヒイラギ holly ; ツタ ivy ; ヤドリギ mistletoe

クリスマスの飾り付けは、かなり早い時期から始められる。ただし今日でも人々の中には一部、次のような信をもつ者もいる。

* 「クリスマスイブの前に飾り付けをしてはならない。中でも特に常緑樹の飾り付けをイヴ以前に済ましてしまうと、不運に見舞われる。」⁶⁾

常緑樹は古くから＜不滅＞を象徴するものとして、異教の時代からも冬至の祭儀に用いられてきた。クリスマスの飾り付けに用いられる伝統的な常緑樹は、ヒイラギ holly、キヅタ(ツタ) ivy、ヤドリギ mistletoe である。以下はそれぞれの樹木に関する伝承である。

(a) ヒイラギ holly

ヒイラギは極めて神聖な樹とされ、うかつに切り倒してはならないとされた。一般にこの樹を切る場合には、物々しくも議会の許可を得たとか、あるいはたとえそれが個人の所有であろうとも、人に見られないように密かに伐採したりしたようである。きこりがこの樹を切ることを嫌がったのも、この樹を切ると危害に見舞われると言われたからである。Kipling, *Diversity of Creatures* (1917; 1994 版)(キプリング『さまざまな生き物』)には“the sacred holly which no woodman touches without orders”⁷⁾ (いかなるきこりも命令がなければ手を触れようとしない神聖なるヒイラギの樹) の記述も見られる。

ヒイラギの樹は、イチイの樹と同様に教会構内や教会墓地にも植えられ、「悪鬼、魔女の危害から守り、またこの樹には決して落雷がないものとされ、人々を稲妻の害から守る」とされた。また民間療法の点では、「しもやけを治療するには、裸足で雪の中に出て(歩き)ヒイラギの樹で打てば効く」とか、「ヒイラギの実を焼いた灰でこすると効く」とも言われる。また、一部の地域(ケンブリッジシアの沼沢地方)では、「熱病を防ぐには、ヒイラギの枝で足をかけばよい」とも言われる。⁸⁾

また、飾り付けに家に持ち込むヒイラギの種類によって、夫婦のどちらが主権をもつかが決まるとも言われる。

* 「持ち込まれるヒイラギの種類で、翌年一年間の夫婦間の主権者が決まる。持ち込むのがとげの多いヒイラギであれば夫が、とげの少ないヒイラギであれば妻が、それぞれ家庭内の主権を得ることになる。」これはダービーシアでの伝承である。⁹⁾

同じダービーシアでも、下記の伝承をもつ地域もある。

* 「クリスマスに、家にヒイラギを飾らないのは縁起が悪い。その際ヒイラギはとげの多少の両種類を飾らねばならない。また両種類は同時に家に持ち込まねばならない。これを違えて、もし先に持ち込んだ種類がとげの多いものであれば夫が、とげの少ないものであれば妻が主権を掌握する」と言われる。これについては、「クリスマス前日に

ヒイラギを集めておき、翌日の早朝ほの暗い時間に家に持ち込むべき」とされる。¹⁰⁾

ヒイラギがキリスト信仰におけるシンボルとなった理由は、2つあるとされる。1つは、ヒイラギは旧約聖書のホウキギにたとえることができることである。もう1つは血のように赤い実をつけ、かつ葉にとげのあるヒイラギは、キリストが流した血の色と、かつ最後に被らされたといばらの冠を象徴するからである。¹¹⁾ クリスマスの装飾において、一般によく用いられる赤と緑の色の配合については、「キリストの流された血の色と、とげのある緑の葉」に基づくものである。

因みにアメリカでは、赤と緑のまだらの葉をもつポインセチアが、クリスマスのシンボルとして人気がある。これは19世紀の初めに、アメリカの駐メキシコ公使ジョエル・ポインセット Joel Poinsett (この名から命名) が船で運んだものと伝えられている。¹²⁾

(b) キヅタ(ツタ) ivy

クリスマスの時期には、その飾り付けにヒイラギとともに必ずキヅタ(ツタ)が用いられ、それは教会の飾り付けにも家庭の飾り付けにも、まさに相応しいものとされている。

一般にツタは、縁起に関しては善悪両様の面を有する。「ツタは家庭の場合、どこにでも植えてよいものとはされず、一般的には家の外側の通路や玄関口に植えるのがよい」とされる。「家の建物全体にツタが這っている状態はよくない」とされるようである。

ツタの木で作ったカップは、中に入れた液体に健康によいエキスを効能を与え、こむらがえりや百日咳に効き目がある、とされる。シュロップシアでは今日でも、子供たちが百日咳の治療に必要な飲み物を飲むとき、このツタのカップを用いるとされる。¹³⁾

ツタの葉は占いに用いられ、「誰にも見られないで、ツタの葉を摘み、繰り返し『ツタよ、ツタよ、お前を摘んだのはこの私／私の胸にお前を置きましょう／私に最初に話しかけた殿方が／確かに私の恋人になりますように』と唱える。この恋人が結婚相手にもなるという想定である。」また、「元日の夜に、皿に水を入れ、それにツタの葉を浮かべておき、十二夜(1月5日)になってもそれが緑のままであれば1年間病気にならず健康のしるしであるが、黒い染みを見つければ病気になる」という占いが伝えられている。¹⁴⁾

(ハロウィーン(万聖節の前夜、つまり10月31日の夜)によくなされた占いと同様に、)これからの一年間で家族の誰かが死ぬかどうかを知りたいという、一種の病的な欲求を満たすための占いがある。「各自がツタの葉を一枚ずつ取り、それを鉢の水の中に入れておき、一晩そのままにしておく。その葉にはしるしが付けられていて、各自が自分の葉を識別できるようにしておく。死ぬ運命にある者には、翌朝、その葉の上に棺の形が現れる」と言われる。これは比較的最近まで、実際に行われていたようである。¹⁵⁾

なおツタの葉を摘むことに関して、サマーセットシアでは、「教会からツタの葉を摘んではいけない。それは病気のしるしなのだから」と言われる。¹⁶⁾

ツタは縁起上、このように善悪両様の解釈をもつが、クリスマスの飾り付けには欠かせないものとされている。

(c) ヤドリギ mistletoe

ヤドリギは自ら地面から生育するものではなく、他の樹に寄生する植物であるという特徴がある。ヤドリギは緑の植物であり、白い真珠のような実をつける。クリスマスの飾り付けとして用いられる場合、一般の家庭には用いられるが、この植物が教会に飾り付けられることは、ごく一部の例外（ヨーク大聖堂 York Minster では祭壇にヤドリギが置かれる）を除いて、まずないものとされる。¹⁷⁾

ヤドリギが教会に飾られない理由としては、2つあるようである。一つは、「ヤドリギは、異教ドルイド教で神聖な植物として崇められるものであるため」、キリスト教会側からは、その神聖を冒瀆するものと見做されたからである。¹⁸⁾ 異教時代の「ドルイド教におけるヤドリギについての記述」として、大プリニウス『博物誌』に、「ドルイド（教司祭たち）は、ヤドリギよりも神聖なものはないと考えている」¹⁹⁾との記述が見出される。

ヤドリギが教会に飾られないもう一つの理由は、ヤドリギが連想させるものに原因があるとされる。「ヤドリギは、時にはただ陽気な連想にすぎないこともあるが、非常にしばしば下品で粗野な行為を連想させる」がその理由とされるようである。さらにこれに続けて、「その下品な連想によって、若者たちは皆、ヤドリギの枝を帽子に入れて持ち歩く」²⁰⁾との記述も見られる。

ヤドリギの飾り付けに関しては、次のような信がある。

- * 「ヤドリギを飾っておけば、決して家からパンがなくなることがない。」つまり、それは生活の保証となる、という訳である。²¹⁾ デヴォンシアに伝わる信である。
- * 「ヤドリギは翌年のクリスマスまでとっておくとよい。それは、雷避けになる。」
- * 「ヤドリギは翌年のクリスマスまでとっておくと、未婚女性の将来の夫を占うのに役立つ（次号にて記述予定）」と言われる。

ところで、ヤドリギについての種々の伝承のうちで最も親しみ深いものは次のものである。

- * 「白い実をつけたヤドリギの枝が、台所を主体に飾り付けられる。その下に女性がたまたま立てば、男性は彼女にキスをする特典が与えられる。キスをするごとにその実がひとつずつ摘み取られ、実が無くなれば特典はなくなる。」この習慣は特に若い男女の近づきのきっかけを与えるものであったようである。Washington Irving, *Sketch Book* (1820; 1973 版) に次の記述がみられる。

The mistletoe is still hung up in farmhouses and kitchens at Christmas; and the young men have the privilege of kissing the girls under it, plucking each time a berry from the bush. When the berries are all plucked, the privilege ceases.²²⁾

（ヤドリギは今でもクリスマスには農家や台所に吊るされる。そして若者にはその下にいる娘にキスできるという特典があり、キスするごとに実を一つずつ摘み取る。実が

全て摘み取られれば、その特典はなくなる。)

因みにこの習慣に関してであるが、これが若い男女間のみの習慣に限られないことを挙げておく。Charles Dickens, *Pickwick Papers* (1837) に次の一節が見られる。

..., old Wardle had just suspended, ..., a huge branch of mistletoe, and this same branch of mistletoe instantaneously gave rise to a scene of general and delightful struggling and confusion; in the midst of which, Mr. Pickwick ...took the old lady by the hand, led her beneath the mystic branch, and saluted her in all courtesy and decorum.²³⁾

(...老ウォードル氏は...ヤドリギの大枝をたった今吊るし終わった。するとこのヤドリギの大枝がすぐに皆の喜ばしい押し合いと混乱を引き起こした。その最中に、ピクウィック氏は...老夫人の手を取り、彼女を神秘的なヤドリギの下に導き、できる限りの礼儀正しさと丁寧さをもって、彼女にキスをした。)

どうやら、クリスマスにはヤドリギの下で女性(特に未婚女性を主体)にキスをし、その実を一粒渡しながら「よいお年を」と挨拶するのが習慣化されていたようである。

「ヤドリギの下でのキスの習慣の根拠」については、種々のものがある。これについて、Tad Tuleja が以下のような諸説を紹介し、若干の見解を述べている。

フレイザー Frazer は、この習慣を「ギリシアの農神祭の無礼講」と結びつけて考えている。フィリップ・ウォーターマン Philip Waterman は、これをもっと深い意味に捉えて、それを、「バビロンの美女」ミリッタ Mylitta を崇める神殿での売春行為の名残りだと考えている。さらに T.G. クリッペン Crippen は、それを、「特にイギリス的な習慣」とみなそうとしている。それは原始的な結婚または豊饒の儀礼を表しているのかも知れないし、また北欧の紛争中止の習慣にまで遡るものなのかもしれないと考える。例えば、「もし人々が森のヤドリギの近くで遭遇した場合には争うことを禁じられていた」とすれば、それは、「平和と友好の誓いを示すために」戸口にヤドリギの小枝を吊るすという慣習にほぼ近いものになる。その誓いは、キスと同様に「友好的な挨拶」であったと考えられる。Tuleja は、この推理はヤドリギとクリスマスの関係を筋道の通ったものにする、と評している。なぜなら、クリスマスは平和の時節だからである。²⁴⁾ この最後の部分では、端的ではあるが、Tuleja のもっともな見解が述べられており、そこには一応の説得性が認められるであろう。

また、一般にヤドリギに関しては次のような伝承がある。ウェールズやウスターシアの農民の間では、「ヤドリギは牝牛に幸運をもたらし」とされた。「新年になって初めて子を産んだ牝牛にヤドリギの小枝を食べさせる。そうすればすべての牝牛に幸運がもたらされる」と信じられた。²⁵⁾

また、その他ヤドリギの薬効に関して補足すると、「ヤドリギの枝を首に吊るしたり、煎じて茶にして飲めば、てんかんや百日咳に効く」との伝承がある。

4) クリスマスツリー Christmas Tree

キリスト教の流布以前のヨーロッパでは、北欧民族の間で樹木、特に果樹や常緑樹を偉大な存在、すなわち神、の化身として崇める習慣があった。キリスト教が広まり、中世の時代、14、15 世紀には、人々の間でクリスマスの時期、特に 12 月 24 日には、決まって聖書中のアダムとイブの物語が上演され、大いにもてはやされた。その奇跡劇で大事な小道具とされたのが、パラダイスツリー *paradise tree* と呼ばれるリンゴの実をつけた常緑樹であり、それが文盲の多かった観客に、エデンの園の失われた純潔を大いに思い出させた。恐らくその純潔への誘いとして、つまり異教信仰における伝承への先祖返的な現象として、16 世紀のドイツではクリスマスの時期に家に常緑樹を持ち込むようになったのであろう、と考えられている。こうした樹木は、17 世紀までにクリスマスツリー *Christbaume* ("Christ trees") として知られるようになったが、19 世紀までは、それは主としてドイツの習慣であった。²⁶⁾

イギリスにおけるクリスマスツリーの導入については、特筆すべき人物がいる。それは、ヴィクトリア女王の夫君アルバート公 Prince Albert であり、彼が従来のクリスマスに大いに異風を吹き込んだ。アルバート公は、1844 年にクリスマスツリーを彼の本国ドイツから取り寄せ、それをウインザーの宮廷に飾った。これがきっかけとなり、商人のたくましい戦術等もあり、クリスマスツリーはほぼイギリス全土に広まり始め、それぞれの家庭でクリスマスツリーが飾られるようになっていった。やがてこれが、いわゆるヴィクトリア朝風のクリスマスの象徴となり、今日のものの元の姿になったのである。²⁷⁾

一方アメリカ大陸では、Tuleja の記述によると、クリスマスツリーは 1820 年代に、やはりドイツ移民によって初めて飾られ、それは数十年先になって定着したとされる。なお Tuleja は、さらにスナイダー Snyder の見解を挙げて、このクリスマスツリーが世界の多くの地域に広まったのは 20 世紀初めの頃である、と述べている。²⁸⁾

[次号「クリスマス (2)」に続く。]

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏 (元、中国短大講師) に、感謝申し上げます。

Notes:

- 1) "Christmas," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London: Thames and Hudson, 1986) 72.

- 2) "Christmas," Kightly, 73.
- 3) "Christmas," Kightly, 73.
- 4) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books 1987) 180. / "Christmas Card," Zolar's *Encyclopedia of Omens, Signs & Superstitions*, ed. Zolar (London: Simon & Shuster, 1989) 76.
- 5) Tuleja, 180.
- 6) "Christmas," Kightly, 73.
- 7) Rudyard Kipling, *A Diversity of Creatures*, Penguin Books, ed. Paul Driver (London: Penguin Classics, 1987 ; repr. London: Penguin Books, 1994) 61.
- 8) "Holly protects," "Holly cures chilblains," & "Holly prevents fever," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990).
- 9) "Holly indicates dominant partner <1871>," Opie & Tatem.
- 10) "Holly indicates dominant partner <1881>," Opie & Tatem.
- 11) Tuleja, 175.
- 12) Tuleja, 175.
- 13) "Ivy," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E & M. A. Radford (New York: Philosophical Lib., 1949; New York: Greenwood, 1960) 154.
- 14) "Ivy Leaf : divination," Opie & Tatem.
- 15) "Ivy Leaf in water : divination," Opie & Tatem.
- 16) "Ivy picked off church," Opie & Tatem.
- 17) "Mistletoe," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 173 (L).
- 18) "Mistletoe, kissing under <1813>," Opie & Tatem.
- 19) 『プリニウスの博物誌』 II, 16-95, 704 (中野定雄他, 東京: 雄山閣出版, 昭和61) 704. Pliny, *Natural History*, XVI, xcvi (*English Version*, ed. Loeb) : The Druids...held nothing more sacred than the mistletoe...
- 20) "Mistletoe, kissing under <1892>," Opie & Tatem.
- 21) "Mistletoe as protection <1955>," Opie & Tatem.
- 22) Washington Irving, *The Sketch Book*, The Works of Washington Irving, Vol. XIX (New York : AMS Press, 1973) 278, Footnote.
- 23) Charles Dickens, *The Pickwick Papers*, XXVIII, The Oxford Illustrated Dickens (1948 ; New York: Oxford UP in USA, 1991) 391.
- 24) Tuleja, 175-76.
- 25) "Mistletoe," Pickering, 173(R)-74(L).
- 26) Tuleja, 174.
- 27) "Christmas," Kightly, 73. / "Christmas Tree," Zolar, 81.
- 28) Tuleja, 174.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans— (18)

IV The Year's Celebrations Part 7: On the Customs and Superstitions of Christmas (1)

Kunihiro FUJITAKA

College of Science and Industrial Technology,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2009)

Christmas, the commemoration of the birth of Jesus Christ, is the most celebrated of Christian holidays. However, looking closer at its history, we find that it has not always been celebrated to a great extent by Christians in certain ages.

In this paper, we would first like to examine the rough history of Christmas, and then describe a variety of customs associated with the festivities. In particular, we would like to include speculation on a number of superstitions related to the preparation for Christmas.

In this way, we hope to convey a better understanding of the affection with which Christmas is enjoyed, along with the cultural background of this most cherished occasion among the English and American population.